

この子供たち

(2)

イーデイス・ウオートン作
松原至大譯

母親のような少女

その若い婦人が、腰をおろした椅子は、クリフ・ホキータ夫人であることを、ボインは教えてやろうかと思つた。ボインの知つていたジョイス・ホキータは、おとなしく席をゆずるような女ではなかつたから。

「失礼ですが、どなたか、ほかの方が、その椅子にくるようなことがありますといけませんから、ぼくが、ほかのを見つけてあげましょうか。前列のがふさがらない中に。」

これは長たらくして、ぎこちない言い方であつた。上手にいいたいと思つているうちに、出てしまつた。その若い婦人は落ちついてゐた。言葉をかけられたことには、驚かないようではあつたが、言葉の意味に驚いたようであつた。

「私の席ではないのでしょうか。」こういつて、その婦人は、名札を調べた。「やつぱり私のです。」

「これは、とんだことを——」

「よろしいですよ。込んでおりますから。」

ブランカに似た長いまつ毛の下から、かの女の褐色の目が、やさしく注がれた。ボインの好意がわかつてゐるように、けれどボインはとまどつたので、星あかりのような、ぼうつとした目のほかには、なにも見えなかつた。

そんなら、この少女が、クリフ・ホキータ夫人なのか。なるほど、そうでないいわれはない。ボインの思つてゐたクリフ

・ホキータ夫人とはちがつてはいたが、今日のように夫婦というものの組合せの、移り変りのはげしい時代には、こんなことが、あり得ないことはない。かれの知つてゐるホキータ夫妻は、二十年前に結婚をしていた。その間にクリフ・ホキータは、半ダースの離婚と結婚をして、それに必要な費用を、棄に出せるほどの金を作つていた。

「あの男にとつては、そんなことは新しい家を建てるのと同じことで、ヨットでのりまわすよりは、ましなことである。」と、ボインは、半ばうらやましげに思い出した。

そうだ、お隣りにゐるのは、正しく最近のホキータ夫人である。おそらく二三人の男は、あの気の毒なジョイスから離れて行つたのであらう。でも、なぜボインは、ジョイスのことを、気の毒なと思わなければならないのか。いろいろと考えてみると、かの女は、結婚という将棋盤の上を、かの女の最初の夫と同じ速度をもつて、前進したのであつた。

とにかく、この若い婦人が、新しいクリフ・ホキータ夫人であるならば自分が、かの女の夫の旧友であることを、ボインは、ほのめかしてよいであらう。漫遊的な船の旅では、それが至つて当り前のことに思えた。けれどボインは、先程テリィが、父親の名を耳にしても、冷やかであつたことを思い出したためつた。こうしたモダンな結婚生活のもつれは、他人にとつて危険が充満している。

その疑問は、ブランカが現れてきたので、解かれることになつた。この女の子は、たちじや、こう草の花の上を舞う蝶のように踊りながら、ボインたちのところによつてきた。そばへ来ると、若い婦人は、たしなめるように言つた。

「あなた、なぜオーヴァを着てこなかつたの。早くスコープの所へ行つて、着ていらつしやい。風が冷めたくつてよ。」

ブランカは抱きつくように、若い婦人により添つた。そして「ええ。」とは言つたけれど、からだを起すかわりに、ボインの方を見て「あのおじさん、おとうさんをご存じだつて。」といつた。

若い婦人は

「珍しいわね。」といつたが、またブランカにむかつて、

「あなた、オーヴァを着ていらつしやいというのに、そしてテリィも着ているか、見てきてちょうだい。——そんなに、

私によりかかるものじやなくてよ。チップが眠っているの、わからない。」といった。

ブランカはおとなしく、つま先を立てて歩いて行つた。この時ボインは、冒険の愛護者であつたエドワード大伯父を心に念じながら、思いきつて

「なかなかよくお仕込みですね。」といった。すると若い婦人は笑つて

「いいえ、みんなよい子供ですわ。」といったが、急に言葉をかえてしまつた。「まあ、ジュー」

若い婦人のあきれたまなざしを追つて、ボインも眼をあげた。そこには、デッキに二列に並んでいる椅子の人たちを驚かせながら、また喜ばせながら、オレンヂ色の髪に、琥珀色の玉をつらねて、まはだかである一人の子供がいた。

と見る間に、この若い婦人は立ちあがつて、ボインの胸に、石鹼のかおりのするかたまりを押しつけて、

「チップを抱いてて下さい。」といったかと思うと、「まあ、あのお馬鹿さん。」といいながらデッキを走つて行つた。

オレンヂ色の髪の子をつかまえると、きつくゆすぶつて、これがこの子の最悪の罪でもあるかのように、

「今にかぜをひいてよ。お馬鹿さん。」としかつた。そして追いかけてきた家庭教師のスコープに、その子を渡すと、ボインのところにもどつてきた。

「まあ、お上手に抱いて下さいましたわねえ。」といつて、まだ眠っているチップをうけとつた。

ボインに向けられたその眼には、親愛の情がこめられていた。しかもブランカのまなざしよりも、もつと若々しいものであつた。

「あなた、赤ちやんのお世話をなさいまして。」

「ええ、だが、こんなよい子ではなかつた——こんなに重くありませんでしたよ。」

「この子は、普通の子供の二人分よりも、二ポンドも重うございます。ピーチーは、この位の時、たつた……」

「ピーチーさんとは。あなたは、さつきジニーとおつしやつたようでしたか。」と、ボインは言葉をはさんだ。

「ジニー。あら、ピーチーとはちがいます。ピーチーは、おかあさんのちがう子、でも、あんな子つてあるかしら。」かの

女は、ひとりで思い出していた。

「おかあさんのちがう子。」ポインは、いよいよ困つて、ただ繰り返した。

「バンとピーチー。この二人は、半分だけ私たちの家のお家ものです。ジューも、そうですね。でも私たちは、ほんとうのきょうだいのようにしておりますの。バンがいたずらをする時だけは、別なのですけれど。バンは、ほんとうにいたずらつ子よ——まあ、もう一度チップをお願いします。今度は、バンよ。ほつておくと、なにをするかわかりません。」

赤いジャンパーを着て、日焼けした少年が、四つばいになつて、なにかけものの真似をしながら、こつちへ来るのであつた。「あの子は、動物ごつこをしているのよ。あら、できやしない。こんなに船がゆれているんですもの。あの子のおかあさんは、ライオン使いでした。あら、怪我をしてよ。そう、スコビー、その子を連れてつてちょうだい。」

やせた胸幅のせまい、でも、親切そうな、しつかりものらしい女が、灰色の髪の上に、色のあせた麦わら帽を横つちよにかぶつて、バンのすぐ後から出てきた。バンをつかまえて、ゆれているデッキの上に、きちんと立たせた。バンはかんしやくを起して、わめきそうになつた。その時、大きなめのう色の目を持った黒いまき毛の褐色の小さな女の子が、一等船室からとび出してきた、両手をひろげながら、バンの方へかけて行つた。するといたずらつ子のかんしやくが、すすり泣きにかわつて、小さな二人の子供は、抱きあつたかと思うと、芝居がかつた泣き声を出した。しかしその女に、それにはかまわずきびしい顔で、二人を船室へ連れて行つた。

ポインのそばにいた若い婦人は、笑いながら椅子によりかかつた。

「スコープつて、面白い人でしょう。今みたいに、バンがピーチの首に抱きつくのが、とてもきれいなのです。『外国人らしくて、男らしくない』つて申しますの。あの二人は、イタリア人ですの。でも、バンはピーチーのいうことを、よくききますから、私、感謝しています。そうでもなかつたら、私たち、あの子に、つきつきりになつてなければなりませんの。」こいういつて、よく眠つてゐるチップを、胸に抱きしめた。

「こんなに大勢の子供さんを連れて、旅行なさるのは、大へんですな。それに、ホキータ君の手助けもなしに。」と、ポイ

ンは追求した。

これを聞くと、婦人はちよつと肩をすばめて、さげすむように、けれどもやさしく答えた。

「あの人は、とても手助けなんていたしません。私たちといつしよに、旅行をすることもきらいなのです。でも、テリーが手伝つてくれますので。」

母親らしいやさしい笑みが、変化の多いかの女の小さな顔に輝いた。顔の中には、いろいろな表情が行き通ひして、それが美しいのか、それともかわいいただけのものか、ボインには、判然ときめることができなかった。

「ばくと同じ船室になさる子ですな。そう、あのくらい大きな子なら、お楽しみですね。」

ボインには、「大きな息子さん」とはいえなかつた。この若い婦人が、テリーのような大きい少年の母親であるとは、とても思えなかつたから。だが、この婦人は、その少年を、母親のちがう子の中には、入れていなかった。なにがなんだかわからないので、ボインは思いきつて、いつてみたのである。

「あのくらいの子は、いつも母親の自慢をするものですね。」

すると若い婦人は、なんと答えてよいのか、考えているようであつた。

「そうですわね。テリーが、ジョイスさんのことを自慢しているか、どうか、私にはわかりませんが。でも、勿論、尊敬はしています。私たちは、みんなそうですわ。あの人は、きれいですもの。プランカだつて、とてもかないはしません。」

ジョイス・ボインはなつかしいその名を、救命帯のように、しっかりとつかんだ。旧友ジョイス・マーヴィンは、たしかにまだ、このホキータ迷路の、どこかに居るにちがいない。だが、どこにいるのであろう。そしてかの女のクリスチャン・ネームを、このように親しげに呼ぶこの若い婦人は、一体なものであろう。わかりかけてきたと思つた総てのことが、またもつてくるのであつた。

「あなたがおつしやつたジョイスさんは、大分以前、ぼくの親しい友人でしたが。」

「まあ、そうでしたの。ああ、うれしい。若い時は、プランカそつくりでしたつて、あの人、おつしやいました。今は少

しふとつています。自分で思うほどではないのですが、それを気にして、今の大きな不幸は、それですつて。」

ポインは笑つてたずねた。

「では、今はそれ以上の不幸はないのですね。」

「ええ、ありませんとも。二人で新しいホネームーンをしているのですもの。チップが生れてから——ねえ、チップおにいちゃん。」

「二人で——」

新しいホネームーンをしているのか。チップが生れてから。それではこの眠つている幼児は、ここにいる若い婦人の子供ではなくて、ジョイス・マーヴィンのか、ジョイス・ホキータのか、それともジョイス・なにがしのか。ポインは、それが聞きたくてならなかつた。

踏み入れた最後の一步で、正しくポインは、迷路のまん中にはいつてしまつた今はどうして出口を見つけるかが、問題である。けれどこの若い婦人の親しなは、かれを信頼しているようでもあつた。あるいは、それはかの女が新しい人に接する、いつもの方式であるかもしれない。だが、荒地から出てきた時代おくれの人間は、それをなにか、同情のしるしとか、または新しい質間に新しい暗示を与えてくれたものかと思つてもよいであらう。

「そう、ほんとうに仲のよい友人でした、一冬の間——」

「それは、永い方だわ。ジョイスさんとしては。」若い婦人が、いい添えるようにいつた。

「そういう間がからですから、ぼくは自分の名を、マーティン・ポインというのを、あなたに申し上げたのです。あなたのお名は——」

「あら、まあ。」若い婦人が、あまりにも大きな声を出したので、ポインの最後の言葉は、ぼつきりと折られてしまつた。初めのうちは、なにごとが起つたのか、わからなかつた。だが、間もなくわかつた。パンが緊足のままで、デッキのせまいところを猫のような速さで歩いているのであつた。椅子にかけていた人たちは、自分の方へくる道を作つて、手をたたき

ていた。

「網わたりも名人だつたのよ、あの子の母は。こういつて、若い婦人は、パンの方へかけて行つた。そしてつかまえると平手でたたいた。パンがわめくと、一層はげしくたたいた。それからとり乱しているスコープのそばに、パンを引きずつて行つて渡した。席にもどつてくると、若い婦人は、青ざめて息切れがしていた。ボインのそばに腰をおろして、

「あなたが、結婚なさるのなら、お子さんをお持ちにならないように。悪いことは申しません。母や父が、私たちと旅行をしたがらないのも、無理はございませぬね。」といった。

ボインは「どうしてこの婦人は、自分の独身なのを知っているのでしょうか」と思つた。

*

*

*



(お知らせ)

倉橋先生を中心とした保育応答研究会は、種々の都合によりまして、残念ながら昨年十二月迄で、とり止めさせて頂きます。

毎回御熱心な多数の方々の御参加を頂きましたことを、心から感謝致しますと共に、右の件をお知らせ致します。

フレーベル館内

保育応答研究会係

幼児の教育 第三巻 第六号

定価 金五十円

昭和二十八年六月二十日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼

発行者

倉橋 惣三

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購読について注文申込その他はすべて発賣所フレーベル館宛願います